

⑪東京ウド（軟化ウド）．NHK趣味の園芸 12月号：101—102．2003．

⑫水かけ菜．NHK趣味の園芸 2月号：87—88．2004．

19 世紀前半における植物学の 近代化と女性の囲い込み： ラウドン夫妻を事例として

新妻 昭夫(人間環境学科)

表記の目的で、2004年3月の26日（金曜）、29日（月曜）～31日（水曜）にかけて、ロンドンにある王立園芸協会（The Royal Horticultural Society）のリンダリー・ライブラリー（The Lindley Library）で資料の探索を行った。

その間に、ウィズリー（Wisley）にある王立園芸協会の庭園、キュー（Kew）王立植物園、大英博物館で、新刊の関連書を調べ主要なものを購入した。またオックスフォードに近いリュウシャム（Rousham）の風景式庭園も見学した（William Kent 設計・施工、18世紀前半に作られたこの様式の庭園としては現存する唯一とされる）。

収集した資料の整理はまだ十分とはいえないが、今回の調査の結果を列挙すると、以下のような点にまとめることができる。

- ① 調査のタイミングは、偶然にも、最適だったのかもしれない。今年（2004年）は王立園芸協会（RHS）の創立200周年にあたり、『RHS 200年史：1804-2004』（Elliot, 2004）という大冊が協会自身によって刊行されたばかりであった。これが基本文献となることはまちがいないが、年

内に各種の関連書が続いて刊行される可能性が高いだろう。

- ② 調査前には、園芸学の確立期における主要な問題として、植物学者で園芸協会の中心に位置していたジョン・リンドリー (John Lindley: 1799-1865) と、在野の造園師で波乱万丈の生涯を送ったジョン・クラディウス・ラウドン (John Claudius Loudon: 1783-1843) の確執のみに注目していた。調査の結果、同じ在野の造園師だったジョウゼフ・パクストン (Sir Joseph Paxton: 1802-65) とラウドンとの間の確執のほうの問題だと認識をあらためた。結論をいえば、パクストンとリンドリーのコンビが時代をリードした (そのひとつの象徴は、1851年の万国博会場にパクストン設計のクリスタル・パレスが採用されたこと。また園芸雑誌として、先行していたラウドンの月刊誌「ガーデナーズ・マガジン」(1826年創刊) が、パクストンとリンドリーが中心の週刊新聞「ガーデナーズ・クロニクル」(1841年創刊) に取って代わられたことも象徴的である)。また、第三の男として、ジョージ・グレニー (George Glenny: 1793-1874) が浮上してきた。この人物はこれまでの王立園芸協会史では、たとえば Fletcher(1969)では完全に無視されていたが、Elliot(2004)では協会への初期の批判者、というより悪徳ジャーナリストとして紹介されている。
- ③ リンドリー、パクストン、ジョン・ラウドンとその妻、ミセス (ジェーン)・ラウドンの評伝としては、それぞれ以下のものがあった。リンドリー: Stearn ed.(1999)。パクストン: Colquehoun (2003)。ジョン・ラウドン: Gloag (1970)。ジェーン・ラウドン: Howe (1961)。このうち最初の三人の評伝は研究書、最後のジェーン・ラウドンの評伝は一般書の体裁をとっているが、孫から日記を借りて書かれた本格的なもの。なおジョージ・グレニーの評伝は未調査 (Tjaden, 1983.; Tjaden, 1986.)。
- ④ 王立園芸協会は創立から半世紀あまりのあいだ、組織として、また財政的にも、かなりの混乱期にあった。その体制を確立した主要人物がリンドリーであった (Stearn ed., 1999; Elliot, 2004)。彼自身も有能だが成功しなかった造園師の息子だったが、植物学者として成功し (1829年に

ロンドン大学の初代植物学教授に就任し、リンネの人為体系を批判し自然分類体系の確立に寄与をした)、王立園芸協会の組織を建て直した。つまり園芸学の確立の立役者となったとっていい。彼を中心として、ラウドン・パクストン・グリニーという三人の男の関係を考えると、いずれもが「園芸ジャーナリズム」を重視していたことには、歴史的な意味があるだろう(印刷税などが緩和され、各種の大衆紙・誌が刊行された時代であった)。最終的に園芸ジャーナリズムの枢軸となったのは「ガーデナーズ・クロニクル」紙(週刊新聞)であり、その編集の中心はリンドリーとパクストンであった。

- ⑤ 1820年代から1850年代に創刊された園芸雑誌の創刊号を調べ、それぞれの発刊の主旨を調べるつもりだったが、知らなかった短命な雑誌が次々に見つかって混乱し、また先行研究があったので、この調査は中止した。この時代の園芸雑誌(園芸ジャーナリズム)の状況と意味については、Quest-Ritson(2001, pp.182-3)が要領よくまとめている。ヴィクトリア朝の園芸雑誌については、Desmond(1977)の詳細な調査が、おそらく唯一の研究だと思われる(これにもとづいて、まず整理すべきこと: 創刊年、タイトル、発行形態、値段、編集人、発行人、特色、継続年・後身雑誌)。
- ⑥ ラウドンの主著とされる『*Encyclopedia of Gardening*』(初版1822年)は、初版刊行から半世紀以上にわたって版をかさねた。つまり当時の「ガーデニング」がどのようなものだったかが、総合的に網羅されている資料と見なすことができる。この本のフルタイトルは、以下のものであった——「*An Encyclopedia of Gardening; Comprising the Theory and Practice of Horticulture, Floriculture, Arboriculture, and Landscape-Gardening, including All the Latest Improvements; A General History of Gardening in All Countries; and a Statistical View of its Present State, with Suggestions for its Future Progress, in the British Isles*」。この題名から、「ガーデニング」という言葉で呼ばれる分野に、今日では独立した別の分野と見なされるいくつもの領域が含ま

れていたことがわかる。すなわち「園芸 (Horticulture)」、「花卉栽培 (Floriculture)」、「樹木栽培 (Arboriculture)」、そして造園とくに「風景式造園 (Landscape-Gardening)」である。

- ⑦ 上の点をさらに詳細に見るため、この本の目次の概略を見てみた (初版と30年後の改定版の比較と時代の変化は、まだ検討していない)。初版の目次を見ると (部・編・章に分かれている)、4部構成となっている。第1部は「庭園の起原、ギリシャ以前から今日にいたる歴史を、さまざまな民族、政府、気候を踏まえて考察」、第2部は「ガーデニングを科学として考察」(植物分類学と植物生理学、機械や道具、建築、設計、繁殖や移植)、第3部は「ガーデニングの英国での実践」、第4部は「英国のガーデニングについての統計 (実状と展望)」である。第3部はさらに、第1編「園芸」、第2編「花卉」、第3編「樹木栽培すなわち植樹 (Arboriculture, or Planting)」、第4編「風景式庭園」から構成される。第1編「園芸」の内容は、「菜園」「果樹園」「温室」に大別される。また園芸カタログには、家庭医薬用の薬草も含まれている。第2編「花卉」の内容は、「花壇」「かん木」「温室」に大別され、今日の私たちが考える庭作りや花作りに近く、また整形式庭園の設計図に似たものも含まれている。
- ⑧ 調査前に気になっていた「花屋」の起原について、二次資料ながらいい資料が見つかった (Davies, 2000)。また『RHS200年史』(Elliot, 2004)の第17章によれば、花卉装飾の歴史は1861年6月25日に開催されたRHSの新しい庭園 (Kensington) の開園式典での品評会 (果物と花の盛りつけ)にはじまる。翌1862年には、次の二冊が刊行された——March, T. C., 1862. *Flower and Fruit Decoration*.; Maling, E. A., 1862. *Flower for Ornament and Decoration*. 後者の著者が前年に出したのは室内ケース向きの花卉と観葉植物の本だったので、同年のRHS品評会に刺激され室内装飾としての盛り花に転向したと推測できる。1870年代には、次のような本が出版された——Hassard, A., 1875. *Floral Arrangements for Dwelling Houses*; Burbidge, F. W., 1873. *Domestic Floriculture*.;

Perkins, J., 1877. *Floral Designs for the Table*. Davies (2000)によれば、街角の花屋さんの出現は1860年代、おそらく50年代後半で、中産階級の出現と同時だという。筆者流に言えば、博物学の大衆化と近代化および『種の起原』(1859年)と同時だといいたい。さらに結論を急げば、プチブル趣味の高揚だけでなく「都市化にともなう市民の緑への希求」が、「部屋を花で飾る」習慣の大衆化をもたらしたのだろう。同じ問題意識は、今日の市民生活における庭作りやコンテナ・ガーデン、菜園や市民農園にも適用できるだろう。

補足：この研究の発想は、次の三つの側面から得られた。

第一は、筆者の以前の研究テーマであったウォーレスの自然選択説の成立過程を追うなかで出会った、1840年代から50年代にかけての社会的な変化である。それまで上層階級の独占物だった博物学が、急激に大衆化した。鳥の剥製、昆虫標本、博物画が暖炉の上に飾られるとともに、「ヴィクトリアン・ケース」と後の時代に呼ばれることになる小型温室が居間に持ち込まれた。同時に、温室が大型化し公園に付設されることにより、教養的かつ健康的な休日の過ごし方が広まった。また博物学雑誌が市民の情報源として急激に普及したのも1840年代であり、それらの前身となる雑誌が1820年代から創刊・廃刊を繰り返していた。貝殻の採集と収集が流行し暖炉上に飾られたのも、また温室の大型化のコンセプトが提案された(ジョン・ラウドンによる)のも、1820年代であった。

第二は、英国のシュテニアによる植物学と園芸の歴史の、フェミニストの視点からの再検討である(Shteir, 1996)。18世紀から19世紀にかけての植物学と園芸のテキストが、女性学の立場から詳細に分析され、とくに1830年代から1860年代にかけて植物が近代化されるとともに、園芸が女性のたしなみとして奨励されたことが析出され、女性の科学からの排除と家庭への囲い込み(いわゆる貞淑で教養ある良妻賢母)があったことを指摘した。ヴィクトリア朝の女性の園芸趣味を、ただ美しく好ましい伝統と見ることはできない。一例をあげると、ピーター・ラビットの物語で有名なベアトリクス・

ポッターは、最近でこそキノコの研究でも注目されている。しかし、彼女が1896年12月3日にキュー植物園の園長ティセルトン=ダイヤーに研究報告を持って訪ねたとき、園長が居留守をつかって会おうとしなかったことが彼女の日記に残されている。その半年前に、著名な化学者だった叔父と同行したときには会ってくれたにもかかわらずである。さらに再訪し、そして慇懃無礼な態度で追い返された日の日記に彼女は、彼は「きっと女嫌いかなにかなのかもしれない」と書いた。また彼女がリンネ協会に提出した論文は、例会で「代理人によって紹介」されたが、議事録に内容が印刷されることはなかった。リンネ協会は第一次大戦まで、女性会員を認めていなかった。

第三の発想の源は、ウィルソンの「バイオフィリア仮説」であった（ウィルソン『バイオフィリア：人間と生物の絆』狩野秀之訳、平凡社。原著1984年）。この仮説の検証は、ケラート等によって継続され、近年では「環境心理学」「環境美学」という言葉も使われている（ウィルソン『生命の未来』2003年、角川書店の第6章；Kellert & Wilson (ed.), 1993; Kellert, 1997）。この仮説は人間と自然環境との関係を総合的に包摂するものだが、ペット（ヒトと動物の関係学）および園芸植物（ヒトと植物の関係学）もその一分野と位置づけられるべきであろう。

この仮説は、いまだ確立されていない新しい分野を模索するものだが、じつは日本で1970年代に先駆的な研究があった（品田譲『ヒトと緑の空間』）。都市化すなわち人口密度の増加と緑被率の減少にともなう人間の行動の変化を社会統計学的に詳細に分析した研究で、公園などの散策、日帰り旅行、泊りがけ旅行という「緑の喪失にともなう都市からの流出」が主要なテーマとなっているが、同時に「花を買う」「植木や苗木を買う」という有効代償行動も検討されている。

以上の、社会史、女性学、進化生物学（環境心理学）の三つの側面から「園芸社会学」あるいは「園芸文化論」を吟味することは、おそらく何らかの展望を拓く可能性を秘めているだろう。

主要参考文献

- Allen, D. E., *The Naturalist in Britain: A Social History*; 2nd ed. (1994), Princeton Univ. Press. 1976.
- Brown, J., *The Pursuit of Paradise: A Social History of Gardens and Gardening*. Harper P Collins (London). 1999.
- Colquhoun, K., *A Thing in Disguise: The Visionary Life of Joseph Paxton*. Fourth Estate (London & New York). 2003.
- Davies, J., *Saying it with Flowers: The Story of the Flower Shop from Victorian Times to the Present Day*. Headline Book Publishing. 2000.
- Desmond, R., Victorian Gardening Magazines. *Garden History* 5(3): 47—66. 1977.
- Elliot, B., *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004*. Chichester: Phillimore & Co. 2004.
- Fletcher, H. R., *The Story of the Royal Horticultural Society, 1804-1968*. Oxford Univ. Press. 1969.
- Gloag, J., *Mr. Loudon's England: The Life and Work of John Claudius Loudon and His Influence on Architecture and Furniture Design*. Oriel Press, New Castle upon Tyne. 1970.
- Howe, B., *Lady with Green Fingers: the Life of Jane Loudon*. Country Life Ltd. (London). 1961.
- Kellert, S. R. and E. O. Wilson (ed.), *The Biophilia Hypothesis*. Island Press / Shearwater Books. 1993.
- Kellert, S. R., *Kinship to Mastery: Biophilia in Human Evolution and Development*. Island Press / Shearwater Books. 1997.
- Minter, S., *The Apothecaries' Garden: A History of the Chelsea Physic Garden*. Forward by H. R. H. the Prince of Wales. Sutton Publishing (Stroud). Paperback ed. in 2003. 2000.
- Quest-Ritson, C., *The English Garden: A Social History*. Penguin Books. 2001.

- Shteir, A. B., *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760 to 1860*. The John Hopkins Univ. Press. 1996.
- Stearn, W. T. (ed.), *John Lindley 1799-1865: Gardener-Botanist and Pioneer Orchidologist*. Bicentenary Celebration Volume. Antique Collectors' Club in Association with the Royal Horticultural Society. 1999.
- Tjaden, W. T., The Gardeners Gazette 1837—1847 and its rivals. *Garden History*, vol. 2: 70-78. 1983.
- Tjaden, W. T., George Glenny: horticultural hornet. *The Garden (JRHS)*, vol. 3: 318—323. 1986.
- 品田譲『ヒトと緑の空間』（1980年、東海大学出版会）。改訂版、東海大学出版会。2004。